

Title	ヘレニズム時代のエン・ゲヴとその周辺：人の営みと湖
Sub Title	Settlement pattern in the coastal region of lake Galilee : from the recent discovery of the Hellenistic site at Ein Gev
Author	牧野, 久実(Makino, Kumi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1995
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.65, No.1/2 (1995. 10) ,p.109- 124
JaLC DOI	
Abstract	The focus of this paper is on the rise of settlements during Early Hellenistic Period in the region of the lake Galilee in Israel. My study is based on the recent result of the excavation at the site of Ein Gev, which is located on the eastern shore of lake Galilee. R. Smith has recently pointed out the cultural break in southern Levant during the Early Hellenistic Period (1990), but excavations of several sites, including Ein Gev, on the coast of lake Galilee revealed some traces of human activity in this period as well as in the Late Hellenistic Period (K. Makino in print). My examination of the change in the settlement pattern from Early Bronze Age to the Hellenistic Period in the coastal area of Galilee, shows the following; 1) Every site includes only two or three periods of occupation; 2) There is no site occupied in Middle Bronze Age II Period; 3) There are one or two sites which represent the area in each period except Middle Bronze Age Period. These findings, which draw a different picture from the change of settlement pattern in the other area in the southern Levant, lead me to the hypothesis that there is a unique settlement pattern applied only to the lake area which is suitable for cultivation, fisheries and transportation. I further argue that the advantages of the lake environment brought settlements arise in the Early Hellenistic Period as well.
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19951000-0109

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ヘレニズム時代のエン・ゲヴとその周辺

——人の営みと湖——

牧 野 久 実

一、はじめに

ヘレニズム時代のレヴァント南部の考古学的状況の特徴については、最近R・H・スマイスが指摘している⁽¹⁾。それによると、後期ヘレニズム時代については遺構、遺物共に多数出土しているのに対し、初期ヘレニズム時代については遺構、遺物共に報告された例が大変少ない。このような状況の中で、イスラエル北部のガリヤラ湖東岸に立地するエン・ゲヴ遺跡から出土した土器群の分析結果は、ここが初期ヘレニズム時代にも存在した可能性を示している。本稿ではそのようなエン・ゲヴを中心としたガリヤラ湖周辺の遺跡分析の特殊性と意義について考えてみたい。

二、ヘレニズム時代のエン・ゲヴの遺構と遺物

エン・ゲヴはガリヤラ湖⁽²⁾の東岸に位置する遺跡である(図1)。現在はキブツ・エン・ゲヴの敷地内にありその施設によって一部は破壊されているが、もとは南北約二五〇メートル、東西約一二〇メートル、高さ約三メートルの遺丘であった。遺跡は一九六一年にB・マザールによって短期の試掘が行われており、その際におおよその遺跡の範囲や時代について見当がつけられていたが⁽³⁾、一九九〇年から一九九二年にかけて日本聖書考古学発掘調査団(団長、金関 恕)が初めて行った組織的な調査によってヘレニズム時代、ペルシャ時代、鉄器時代に属する五つの文化層についてより詳細な状況が明らかにさ

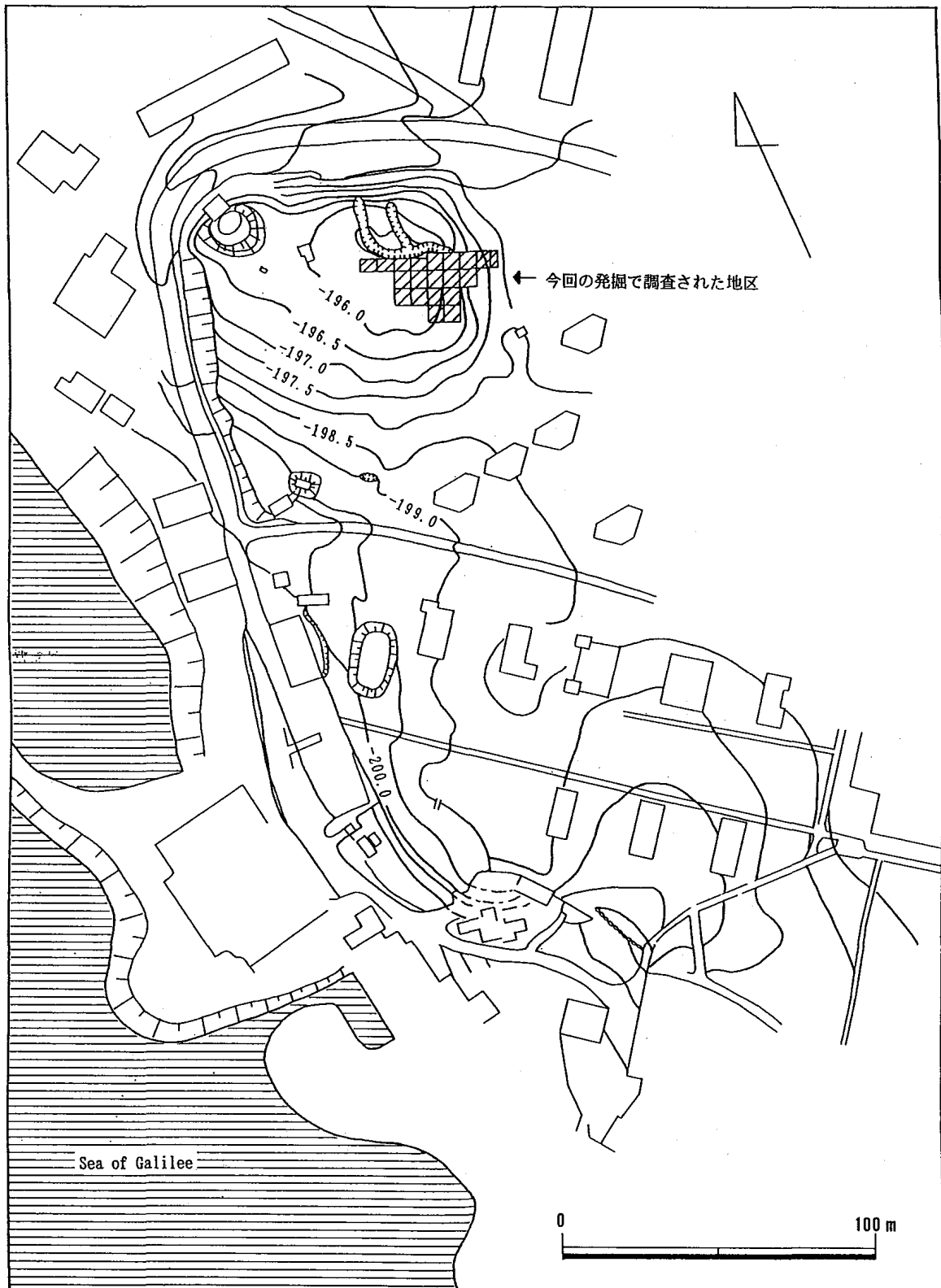


図1 エン・ゲウ測量図(註(4)所収)
(白抜きは現在のキブツの建物)

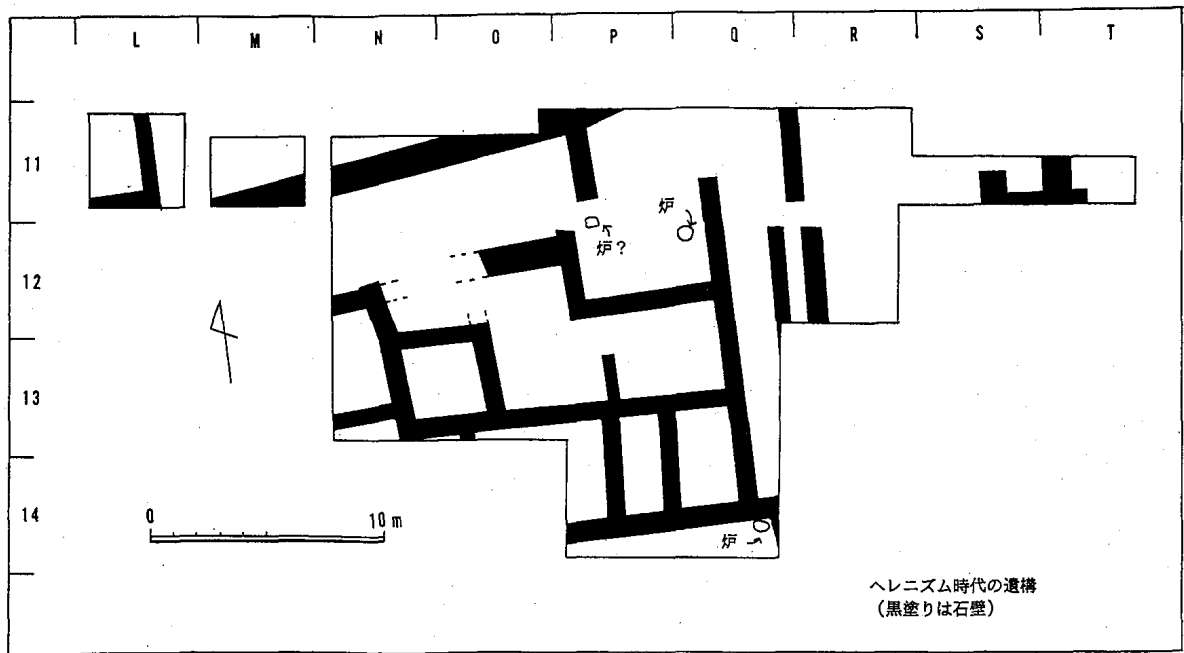


図2 エン・ゲヴ遺構図(註(4)所収)

れた。⁽⁴⁾

エン・ゲヴでは第一層がヘレニズム時代に属する(図2)⁽⁵⁾。この町はそれ以前のペルシャ時代に一時的に居住された後(第二層)しばらく放棄され、その後再び人が住み着いた際にアクロポリスからテルの裾野付近にまで住居が建てられた。遺構として残されていたのは主として煉瓦づくりの壁を支えていた石製の基礎部であるが、そのプランはそれ以前の鉄器時代の遺構プランとは若干ずれていることから、ヘレニズム時代の人々がここへやって来て、すでに土に埋もれて丘状を呈した遺跡の上に新たに基礎部を設けて町を築いたと考えられる。発掘された地区からは数本の通路を挟みながらところどころに中庭のような外部空間を設けた建物の跡が検出された。これらの建物の床面や中庭から炉や水利施設とも考えられる遺構や日常用の土器が多く出土したことから、これらの空間は一般的な住居跡と考えられる。現在の段階では町の限られた部分が明らかにされたにすぎないので全体の規模や構成、町の性格については不明だが、建てこんだ住居の様子や鉄器時代に築かれた高い壁の基礎部のためにスロープ状となっていた部分にテラス壁を設けて水平部分を設けるなど(図2、Q/R・11/12)ここ

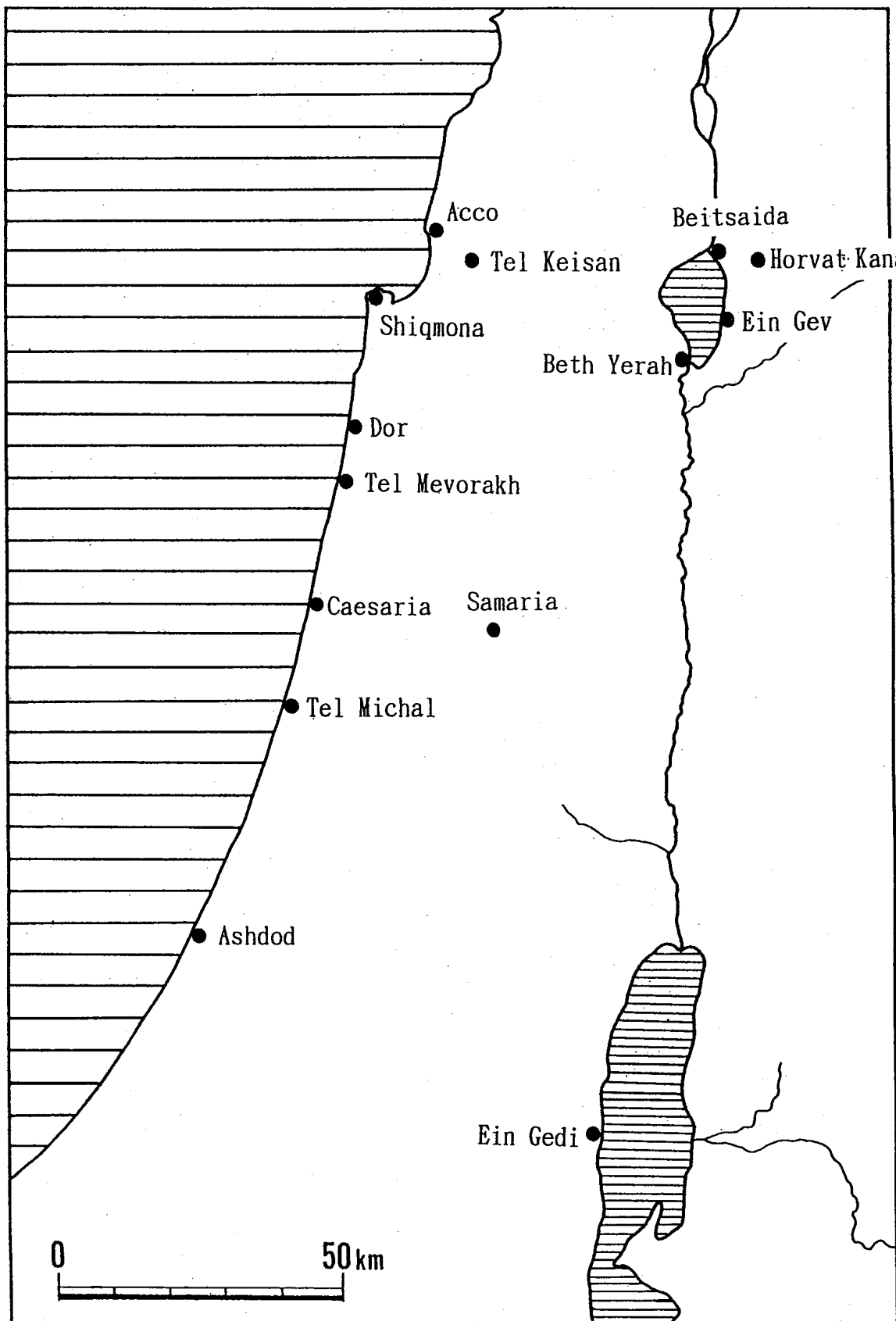


図3 初期ヘレニズム時代遺跡分布図

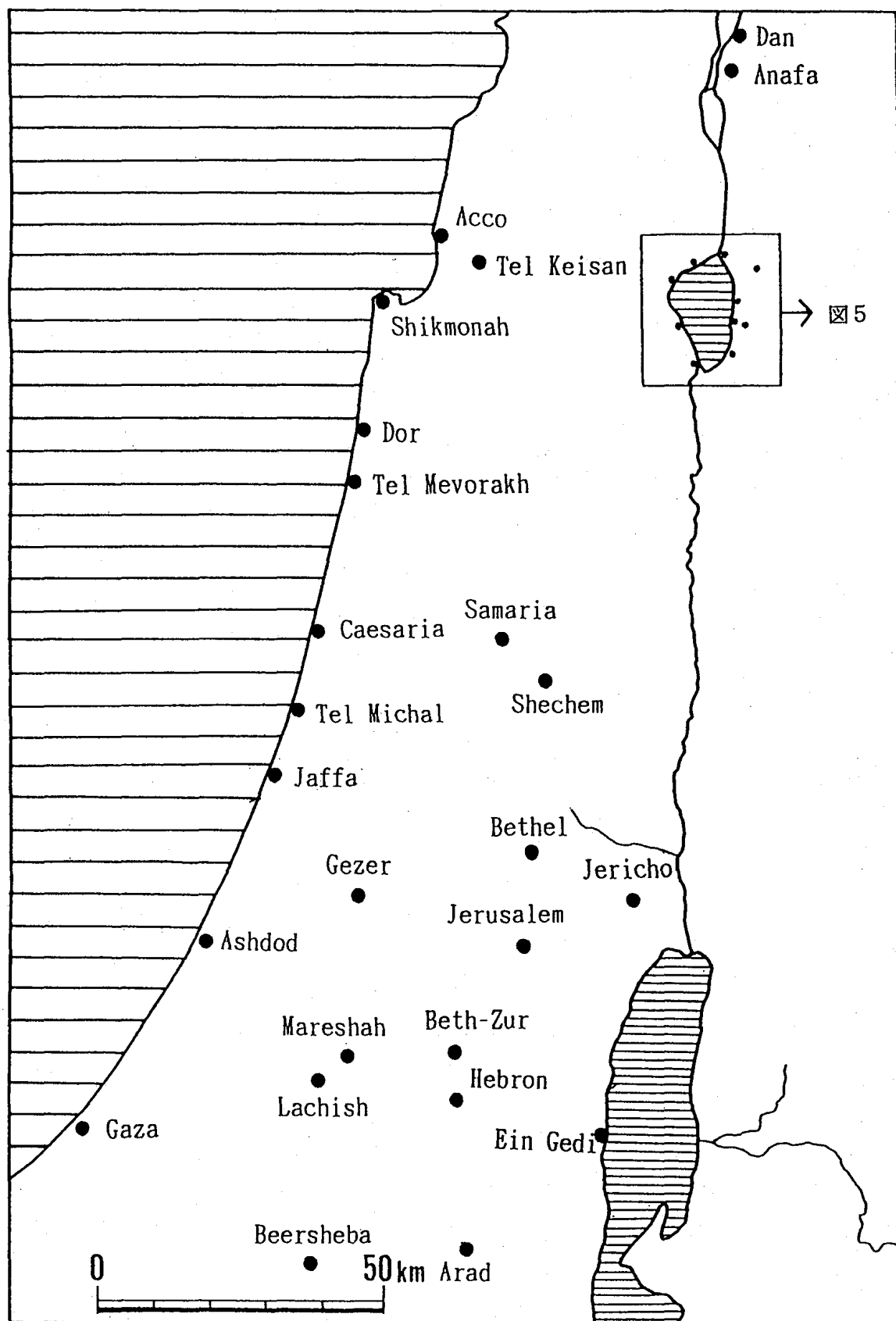


図4 後期ヘレニズム時代遺跡分布図

が相当量の労働力を投入して築かれた町であったことが想像される。

建物内の土を踏み固めた床面や外部空間からは多数の土器が出土した。それらは、主として鉢、調理用瓶、皿、香油瓶、壺、水差し、ランプといったものの断片である。これらを分析するにあたってはテル・ミハルの出土物が重要な比較資料となっている。⁽⁶⁾テル・ミハルが発掘されるまでヘレニズム時代の土器に関する基本的資料集としては、P・ラップがまとめたものがあつた。⁽⁷⁾しかし、これはシェケム、ベテル、ベト・ツールといった後期ヘレニズム時代の遺跡からの出土物を中心としたもので、ヘレニズム時代全般について理解するには必ずしも充分なものではなかつた。以来、初期の様相を明らかにするような遺跡がほとんど発見されなかつた中で、テル・ミハルは唯一この時代の明確な層位が見られる遺跡として重要な資料を提供している。そこでは、第V層が前三世紀(初期ヘレニズム時代・プトレマイオス王朝)、第IV層が前二世紀(後期ヘレニズム時代・セレウコス王朝)、第IIIb層が前一世紀前半(ハスモニア時代・アレクサンダー・ヤンナイ)、第IIIa層が前一世紀後半(ハスモニア時代・アレクサンダー・ヤンナイ以後)にそれぞれ属

している。比較資料がないために、これらの資料から、即、初期ヘレニズム時代と後期ヘレニズム時代の土器の構成を決定することは時期尚早であるが、エン・ゲヴからの出土資料を分析するにあたって現在頼れる唯一の資料であることは否定できない。

エン・ゲヴからの出土物の多くは、テル・ミハルの第V層、すなわち初期ヘレニズム時代とされたものと興味深い類似を示している。⁽⁸⁾特に、エン・ゲヴに見られる内湾する口縁部と緩やかに曲がつた胴部を有する鉢(碗)、高台付きの底部を有する鉢や皿、外反する口縁部と胴部の中程に屈曲部分を有する鉢、底部から胴部への立ち上がり厚みを持つ香油瓶、約三―五ミリメートルと薄く焼成の良い調理用瓶、口縁部の断面が丸みを帯びた壺、などは初期ヘレニズム時代のテル・ミハルを代表する特徴である。⁽⁹⁾

三、初期ヘレニズム時代のレヴァント南部

最初に触れたように、レヴァント南部における初期ヘレニズム時代の考古学的な証拠はほとんど発見されていない。遺構のみが検出されないのならば後期ヘレニズム

時代の建築物によって破壊されてしまったとも考えられるが、遺物もほとんど出土していないのである。この状況についてスミスは主として二つの理由をあげている。

第一に歴史的な背景である。初期ヘレニズム時代に関する文献史料としては、さほど多くはないが、ポリビウス、ゼノン、ストラボ、そしてクニドスのアガタルキデスの記述がある。ところが、スミスの分析によると、ポリビウス、ゼノン、ストラボは前四世紀―前三世紀のレヴァント南部が弱体化した様子を記しておらず、唯一アガタルキデスが、アレクサンダーの死後、各地で戦争が勃発した様子や、プトレマイオスがエジプトに大勢のパレスチナ人を連れ去ったことについて言及しており、当時のパレスチナの不安定な状況について記した資料となっている。かつて、M・I・ロストヴツェフは、プトレマイオス王朝がレヴォント南部を文化的に水準の低い存在と見下し、ギリシャ文化を強制したことがレヴァント南部の衰退につながったと考えた⁽¹⁰⁾。

しかしながら、スミスの見解によるとそのような証拠はなく、確かにプトレマイオス王朝はある種のカースト制度をこの地域に持ち込んだが、それはあくまでもペルシア時代からの伝統をも考慮したものであったとして、

ロストヴツェフの見解に疑問を投げかけている⁽¹¹⁾。スミスの見解は、レヴァント南部にこの時期の遺跡そのものが少ないという事実により則したものであろう⁽¹²⁾。彼は、さらに、プトレマイオス王朝がこのような融合策をとりながら、実はレヴァント南部を資源の供給源とみなしこれを搾取していたと述べている⁽¹³⁾。このために、新たな都市の開発よりも、むしろ肥沃な地域の町や村といった生産に携わる組織の開発により積極的であったために、遺跡として明確な形を残さなかったと彼は考える。

一方、スミスは第二の要因として自然環境の変化をあげている。この考えはF・L・クーキーの論文に基づいたものである⁽¹⁴⁾。クーキーは、年輪時代測定法に基づき、南レヴァントの気候が約五七〇年周期で涼しく湿潤な時期と暑く乾燥した時期を繰り返したと結論づけた。この周期は確かに過去のパレスチナにおける様々な文化変化の時期と一致する⁽¹⁵⁾（註14）。このような自然要因も考慮しつつも、スミスはレヴァント南部に初期ヘレニズム時代の遺跡が見られない主たる要因をプトレマイオス朝とセレウコス朝のパレスチナに対する対応の違い、すなわち都市よりも直接生産に従事する町や村を重視したためにもたらされた考古学的現象であると結論づけている。

四、ヘレニズム時代の居住パターン

確かに、レヴァント南部には初期ヘレニズム時代の遺跡は数少ない。しかしながら、地中海沿岸及びガリラヤ湖岸についてはこれまで初期の遺物や遺構が発見されている(図3)。例えば、地中海沿岸部では、アッコ、シクモナ、ドル、テル・メヴォラク、カエサリア、テル・ミハル、アシュドドといった遺跡が見られる。この状況は、この地域が地中海世界の影響を受けやすい地理的状况故に、むしろアレクサンダー以前からヘレニズム化が進んでいたと説明される。⁽¹⁶⁾ 一方、ガリラヤ湖岸からは、エン・ゲヴ以外にも初期ヘレニズム時代の遺物が出土している。例えば、ベト・サイーダでは鉄器時代第Ⅰ期の居住跡が放棄された後にヘレニズム時代の初期に再び人が住み着いたらしく、第Ⅱ層からは前三世紀―一世紀に属する遺物が出土しており、⁽¹⁷⁾ ホルヴァト・カナフからも同様に鉄器時代第Ⅰ期の上層から初期ヘレニズム時代に属する土器が、⁽¹⁸⁾ ベト・イエラからは初期青銅器時代第Ⅲ期の居住層の数センチメートル上部から前三世紀に属した人物の名前を記したスタンブや、その付近からはプトレマイオス一世の名前を記した、すなわち前四世紀

―前三世紀のコインがそれぞれ出土している。⁽¹⁹⁾ 初期の明確な居住層は検出されていないが、これらの遺物は初期ヘレニズム時代のガリラヤ湖周辺に小規模な町や村が営まれていたことを意味する。

さらに、近年新たに港や堤防といった古代の遺構が明らかにされたが、⁽²⁰⁾ M・ヌンは周辺の遺物の状況よりこれらの多くがヘレニズム時代に初めて設けられたと説明している。⁽²¹⁾ これらの港は湖岸全体を等分割するように分布している(図5)。ガリラヤ湖には北の数カ所の入り江を除いては、元来、自然の港に乏しい。従って、こういった船着き場が町や村の付近に設けられ、町や村と共に湖岸のネットワークを形成していたと考えられる。また、初期ヘレニズム時代に至って遺跡数が増加したが、その背景として、初期ヘレニズム時代以降、漁労や湖上交通を中心にした湖への依存度が急速に高まったことが考えられる。

この時代の漁労や湖上交通に関しては、様々な時代のもしくは時代が不明だが湖周辺から出土した漁具らしきもの、壁画や史料からの情報によって、当時の様子をある程度復元することができる。漁具としては、正確にいつの時代に属するのかが不明だが、石灰岩、玄武岩、フ

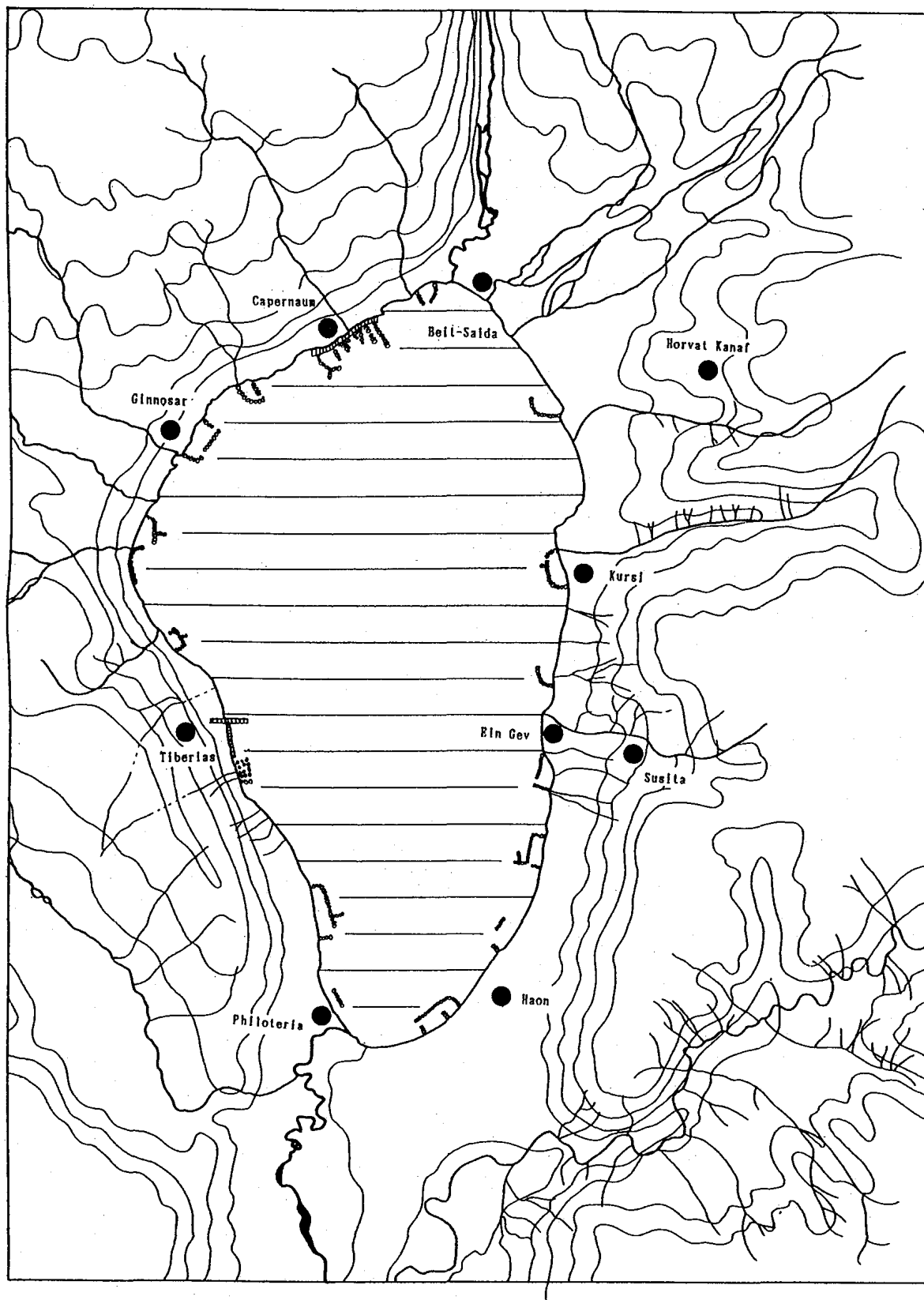


図5 ガリラヤ湖の港関係施設分布図(註(21)挿図一部改変)

リントに小さな穴を穿った石錘のようなものや、土器片を利用した土錘、そして石灰岩や玄武岩の錨石がある。⁽²²⁾

魚骨等の動物遺体については出土例がきわめて少ないが、現在のガリラヤ湖には、主としてテラビヤ、ニゴイ、キネレット・イワシといった在来種の魚が生息していることや、新約聖書にも五〇種にのぼる魚の名前が記されていることから、人々が古来よりこれらを蛋白源として利用していたことは間違いない。

旧約聖書や新約聖書には古来の漁法についても記されている。ヌンはこれらを現代の方法に当てはめて解釈しているがそれによると、単純な一本釣り以外にも地引き網、投げ網、小糸網といった方法が知られていたようである。⁽²³⁾ところで、タルムードには「ヌンの子であるヨシユアが湖岸に地引き網を張ったり投げ網漁を行う権利をナフタリ族にだけ与えた。彼らがこの権利を行使できるように、さらにガド族の土地であった湖の南端を（網の幅だけ、すなわち約四〇―五〇メートル）彼らに与えた」というくだりがある。⁽²⁴⁾ナフタリ族は鉄器時代にガリラヤ湖の西側に住んでいた部族で、アシユル、イシヤカル、ゼブルンといった他の部族と共に上部ガリラヤ地方（地中海沿岸部からガリラヤ湖西岸まで、北はレバノン

山脈から南はアッコからサフェッドへ向かう道を境界とする地域）を分け合っていた。この記述は、一本釣りがすべての部族と人々に許された方法であったのに対し、網を用い大量に魚を捕る漁法が特定の集団に限定された方法であったことを示しており、こうすることによって乱獲を防いだ一種の資源管理とも考えられる。

さらに、ガリラヤ湖は周辺地域を様々に結びつける交通の要所に位置していた。ハイファ、アッコという地中海沿岸地域から東西に伸びる道、ヨルダン川流域を経由して南北を結びつける道、ガリラヤ湖東部からシリアのダマスカスを経由してメソポタミヤ方面へ伸びる道、と数本の主要道路がこの付近で交差している。湖上もそのような周辺地域との交流に重要な役割を果たしていた。⁽²⁵⁾

五、ガリラヤ湖周辺の長期的な居住パターンの変化

このようなレヴァント南部全体の状況の中で、初期ヘレニズム時代にエン・ゲヴを初めとした居住跡がガリラヤ湖岸に存在したことを一体どのように説明できるだろうか。このことを考えるにあたって、ガリラヤ湖周辺の居住パターンの歴史的変化について検討し、それをレ

ヴァント南部の他の地域と比較してみたい。

図6は都市期が始まってからヘレニズム時代までのガリラヤ湖周辺の遺跡分布を⁽²⁶⁾図である。これを見るといくつかの特徴的な点があげられる。第一に、一つの遺跡が二―三時代といった短い時間幅しかもたないことである。例えば、ベト・イエラは初期青銅器時代、若干の青銅器時代中間期、初期及び後期ヘレニズム時代、テル・キノロットは初期青銅器時代と鉄器時代第Ⅱ期、テル・ハダルは後期青銅器時代第Ⅰ期―鉄器時代第Ⅰ期、ベト・サイーダとホルヴァト・カナフは鉄器時代第Ⅰ期と初期及び後期ヘレニズム時代、そしてエン・ゲブは鉄器時代第Ⅱ期からヘレニズム時代である。レヴァント南部を概観した場合、乾燥地域や山岳部などの辺境地帯においてはこのような短い時間幅の遺跡が一般的だが、北部の肥沃な地域では初期青銅器時代、中期青銅器時代第Ⅱ期、後期青銅器時代第Ⅱ期といった都市期の居住層が積み重なりテルを形成するのが一般的である。ガリラヤ湖周辺は、湖という豊かな水資源に隣接しており、一般的な都市のように泉や川筋、貯水槽といった特定の水源に固執する必要がなかったために、むしろ大きなテルを形成するほど長期的な定住活動が行われなかったとも考えられる。

ヘレニズム時代のエン・ゲブとその周辺

第二の特徴として、いわゆる都市の復活期である中期青銅器時代第Ⅱ期の遺跡が検出されていないことである。パレスチナ北部を中心とする肥沃な地帯では初期青銅器時代の都市が青銅器時代中間期において一度崩壊した後、中期青銅器時代第Ⅱ期で再び大都市が営まれるというパターンが一般的に見られるのだが、ガリラヤ湖周辺においてはこのような状況が見られず、この時代の遺跡が一つも検出されていないばかりか、初期青銅器時代にパレスチナで最も繁栄していた都市の一つであるベト・イエラも放棄されたままであった。このことは、湖岸地域に独特の都市の発達パターンというものも考慮しなければならぬことを意味している。第三の特徴としては、同時期の遺跡の数は一―二箇所と少ないうえに、地域を代表するかのような遺跡が必ず一箇所見られる点である。例えば、初期青銅器時代はベト・イエラが、後期青銅器時代はテル・ハダルが、鉄器時代は第Ⅰ期はテル・ハダル、第Ⅱ期はエン・ゲブが、そして初期ヘレニズム時代はおそらくエン・ゲブが、それぞれこの地域を代表している。このことは、湖を中心とするこの地域が一つの単位として機能していた可能性を示唆する。

上の三点に注目すると、パレスチナの大きな二つの居

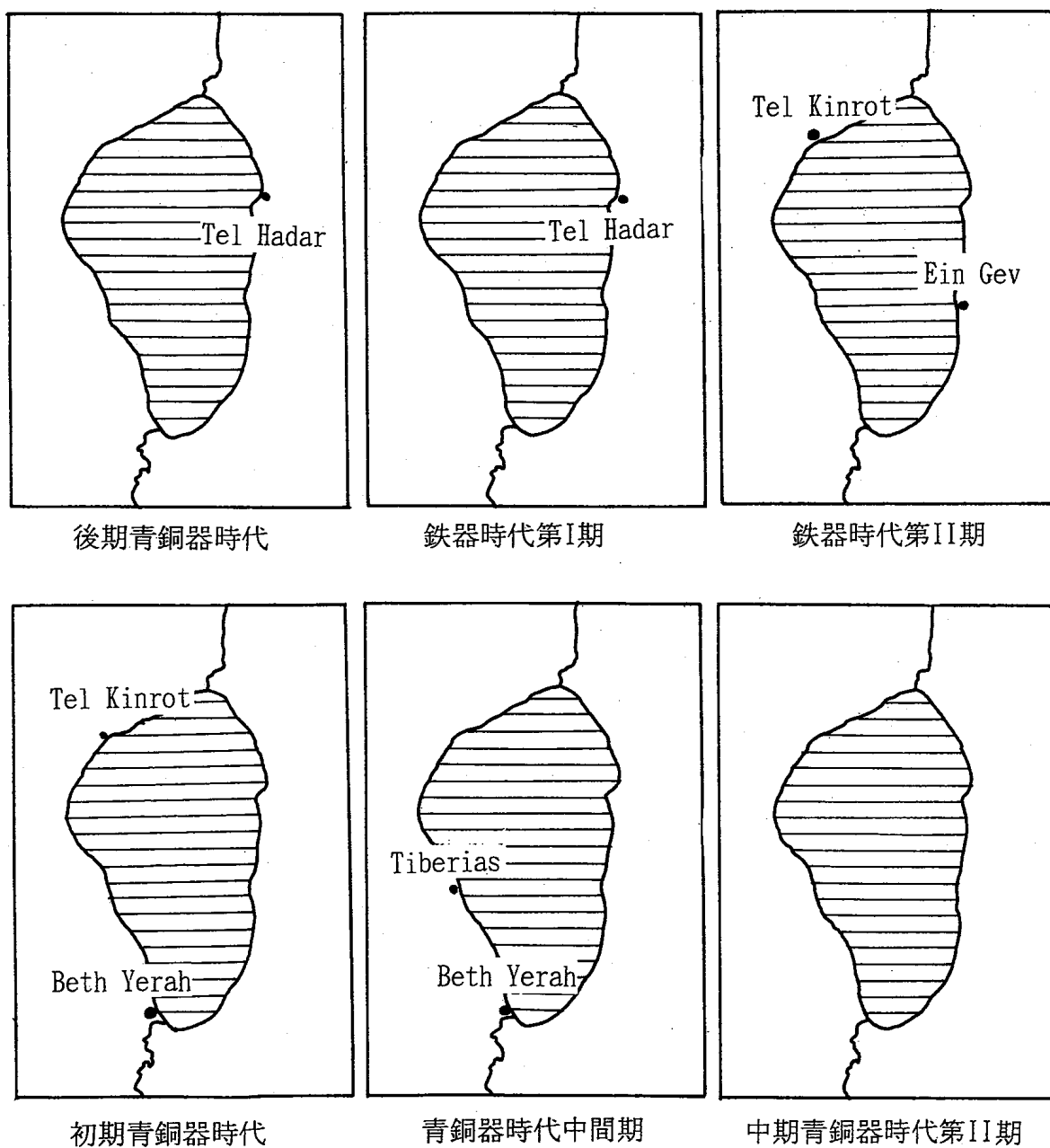


図6 ガリラヤ湖周辺の遺跡分布の変遷

住パターンの流れ、すなわち、肥沃な地域でいくつかのブランクを置きながらも長期間の都市生活が営まれるパターンとも辺境地域において一時的な定住地もしくはキャンプサイトが設けられるパターンとも異なる、いわば湖を中心とした地域独特のパターンともいうべきものが存在することに気づく。さらに、これらの湖岸に立地するほとんど全ての遺跡に大規模な穀物庫、もしくは倉庫のような建造物が見られることもあげておきたい。⁽²⁷⁾このことは豊かな水資源を活かした農耕や水運を活かした商業活動が活発に行われていたことを示している。

六、まとめ

ここで冒頭にも述べたスミスの論文を振り返ってみた。彼の見解は、(1)早くから地中海世界と接触のあったレヴァント南部の沿岸部を例外としてそれ以外には初期ヘレニズム時代の遺跡が見えない。(2)このような状況の背景にはこの地域を資源の供給源として搾取の対象とみなしていたプトレマイオス王朝の政策に原因がある、というものであった。しかしながら、最近行われた調査によって、ガリラヤ湖周辺も初期ヘレニズム時代に人々が活動していたことが明らかにされた。この理由を探る

にあたつて、筆者はスミスのように同時代を横割りに見るのではなく、むしろ同地域を縦割りに見た。すると、最初の都市期以来、湖周辺地域には他の地域とは異なる独特の居住パターンが見られ、そこでは、(1)レヴァント南部全体の発達や衰退に関係なくほぼ常に一定した定住地が設けられていること、(2)しかも湖周辺に必ず一―二箇所この地域を代表する規模の遺跡が存在すること、(3)さらにそれらの遺跡には、レヴァント南部を代表するような規模の穀物庫や倉庫らしき建物跡が見られること：が明らかになった。以上の三点は、ガリラヤ湖周辺がその豊かな水資源故に気候の乾燥化を主な原因とした衰退期をも含めたそれぞれの時代において沿岸の代表的な町を中心として一つのまとまった地域を構成し、周辺地域の食料源及びこれらを輸送するための中継地としての役割を持っていた、と考えられる。そして、初期ヘレニズム時代にこの地域に居住活動が行われた背景もこのような点にあると考えられる。この仮定は、スミスの歴史的な背景を主とした見解と食い違うものでは決してない。なおかつ、クーキーが導き出したこの時期の気候の乾燥化という見解とも一致する。

しかしながら、上のような結論には問題点も多数含ま

れる。まず第一に初期ヘレニズム時代に関する遺物の組成や編年が確定していないことである。これについてはテル・ミハルのような層を成した遺跡が今後多く調査されるのを待たねばならない。次に、湖岸付近の古環境についてこれまで際だった研究がなされていないことである。レヴァント南部という枠の中でこの地域をとらえるためには古環境の復元を行う必要があるだろう。特に、歴史時代の遺跡を発掘調査する場合にこのような視点が無視されがちなので注意しなければならない。さらに、湖を中心とした生業についてもさらに追求する必要があるだろう。

註

- (1) Smith, R. H. "The Southern Levant in the Hellenistic Period." *Levant* 22, 1990, pp. 123-130.
- (2) ガリラヤ湖はイスラエル北部にある湖である。北緯三三度、海拔マイナス約二〇〇メートルに位置し、規模は南北二一キロメートル、東西一二キロメートル、最深四メートルで、日本の四国ほどの面積しか持たないイスラエルで唯一の淡水湖である。現在、ヘブライ語ではキネレット湖と呼ばれているが、かつてはこの他にギネセレット湖、ティベリア湖などとも呼ばれた。
- (3) Mazar, B., A. Biran., M. Dothan., and I. Dunayevsky.,

- "Ein Gev. Excavations in 1961." *Israel Exploration Journal* vol. 14, 1964, pp. 1-120.
- (4) 報告書は近日刊行される予定である(英文)。従って、ここでは事実の詳細な記載は行わない。
- (5) 報告書 of Makino, K., "Architecture in Hellenistic Period at Ein Gev (仮題)" (近日刊行予定) を参照
- (6) Fischer, M., "Hellenistic Pottery (Strata V-III)", *Excavations at Tel Michal, Israel* (eds. Z. Herzog, G. Rapp. Jr., and O. Negbi), Publication of the Institute of Archaeology Hum 8, Tel Aviv, 1989, pp. 177-187.
- (7) Lapp, P. W., *Palestinian Ceramic Chronology*, New Haven, Conn, 1961.
- (8) 報告書 of Makino, K., "Pottery in Hellenistic Period at Ein Gev (仮題)" (近日刊行予定) を参照
- (9) Fischer, M. (註4参照) p. 178, Fig. 13-1.
- (10) Rostovtzeff, M. I., *The Social and Economic History of the Hellenistic World*, vol. 1, Oxford, 1941.
- (11) Smith, R. H. 註(1) p. 124. 左。
- (12) プトレマイオス王朝のレヴァント南部に対する融合的政策については Bagnall and Bevan を参る。Bagnall, R. S., *The Administration of the Ptolemaic Possessions outside Egypt*, Leiden, 1976. Bevan, E., *The House of Ptolemy: A History of Egypt*. Rev. ed, Chicago, 1968.
- (13) Smith, R. H. 註(1) p. 124. 右。
- (14) Koucky, F. L., "The Regional Environment," *Roman Frontier in Central Jordan, Part I* (ed. S. Thomas Parker;

BAR International Series 340 [1], London, 1987, pp. 11-40.

- (15) 初期青銅器時代第Ⅰ期(前三三〇〇年—三〇五〇年)に都市化の萌芽が現れ、初期青銅器時代第Ⅱ—Ⅲ期(前三〇五〇年—二三〇〇年)に都市化が進展するが、青銅器時代中間期(前三三〇〇—二〇〇〇年)には、都市の衰退が見られる。その後、中期青銅器時代第Ⅱ期(前二〇〇〇年—一五五〇年)に諸都市が復活するが、再び後期青銅器時代第Ⅰ期(前一五五〇年—一四〇〇年)には各地で城壁の無い無秩序なプランの町が形成される。そのうち、後期青銅器時代第Ⅱ期(前一四〇〇年—一二〇〇年)に城壁で囲まれた都市が形成されるが、鉄器時代第Ⅰ期(前一二〇〇年—一〇〇〇年)の初めには再び都市が衰退し、さらに鉄器時代の第Ⅱ期(前一〇〇〇—五八六年)に都市は復活する。このように、古代レヴァント南部では都市化とその衰退が数百年単位で繰り返される。
- (16) Miller, M., "The Phœnician Cities . . A Case Study of Hellenization." *Proceedings of the Cambridge Philological Society* 209, 1983, pp. 55-71
- (17) Arav, R., "Et-Tell (Beitsaida)", *Excavation and Surveys in Israel*, vol. 7\9, 1988, pp. 177-178.
- (18) Ma'oz, Z., "Horvat Kanaf." *Excavation and Surveys in Israel*, vol. 4, 1985, pp. 57.
- (19) Yosef, O., and E. Eisenberg, "Beth Yerah." *Excavation and Surveys in Israel*, vol. 4, 1985, pp. 14-16.

- (20) 一九八九年から一九九一年にかけてイスラエル地域で起こった渇水によって、ガリラヤ湖は水位はこの一〇年間の平均よりもおよそ二メートル〜四メートル下がった。このために、新たな湖岸線の周辺から先史時代、及びヘレニズム時代以降の遺構が明らかにされた。このうちの、先史時代の遺跡については考古局のD. Nadelが(一九八九—一九九一)、歴史時代の遺跡について同じく考古局のY. Sepanskiが(一九九一)組織だった調査を行っている。これらの調査結果については、Nadel, D., "Submerged Archaeological Sites on the Shores of Lake Kinneret", *Mifqot*, 22 1993, pp. 1—12.

渇水によって古代の遺跡が明らかにされた背景には、過去の水位変動がある。十九世紀の絵図によると、当時のガリラヤ湖にはヨルダン川の他にもう一カ所の出水口が存在していた。このため、湖南に位置するベト・イエフはこれらの二つの川に存在していた。このため、湖南に位置するベト・イエフはこれらの二つの川に挟まれ島状を呈していた。ところが、次第に堆積する土砂によって出水口の二つが塞がり、水位が急激に上昇したらしい。詳細についてはNun, M. *The Sea of Galilee—Water Levels, Past and Present*, Kibbutz Ein Gev, 1991.を参照。

(21) Nun, M., *The Sea of Galilee and its Fishermen*, Kibbutz Ein Gev, 1989. *The Sea of Galilee—Newly Discovered Harbours From New Testament Days*, Kibbutz Ein Gev, 1992

(22) Nun, M., *Ancient Stone Anchors and Net Sinkers from the Sea of Galilee*, Kibbutz Ein Gev, 1993.

- (23) 上掲(註19)
- (24) B. Kam 81a, 81b. T. B. Kam Ⅲ 17.
- (25) 湖上交通や漁などに利用されたであろう船については、後の時代に属する壁画や実際に出土した木造船から想像することができる。例えば、一九八九年にガリラヤ湖の北西岸、ギノサルで初めて発見された今から約二〇〇〇年前(炭素14年代測定による:七〇B・C十一九〇)の木造船は、長さ九・〇メートル、幅二・五メートル、高さ一・二五メートルの構造船で、杉材を縦に張り合わせ樫の枝を横にわたしたものであった。詳細については、Wachsmann, S., K. Raveh and O. Cochen, "Ginnosar, Ancient Boat", *Excavation and Surveys in Israel*, vol. 5, 1986, pp. 42-44. חֲוֹשֶׁי' Wachsmann, S., "The Excavation of Ancient Boat in the Sea of Galilee (Lake Kinneret)", *Atiqot* 19, 1990. を参照。
- (26) ガリラヤ湖の周辺に最初に人が住み着いた最古の証拠は現在のキブツ・エン・ゲヴのやや東から発見された人骨と居住跡で、約一〇万年前に遡るものである。しかしながら、ここでは定住化が行われ、生業、行政、政治といった社会組織がある程度成立した段階を扱っているために、初期青銅器時代以降の居住パターンに限った。
- (27) 初期青銅器時代のベト・イエラ、鉄器時代のテル・ハダル、エン・ゲヴ、キノロットでこのような遺構が検出されている。これらのどれもが、それぞれの時代のレヴァント南部全体でも大変際立つ要素である。例えば、ベト・イエラのものは容量が一四〇〇―一七〇〇トンと

いう初期青銅器時代最大規模を誇る穀物庫で、テル・ハダル、エン・ゲヴ、キノロットのものは列柱付建物と呼ばれ、これらの他では、メギッド、ベル・シェバといった同時代のレヴァント南部でも重要な都市にしか見られないものである。ベト・イエラの穀物庫については、Mazar, A. *Archaeology of the Land of the Bible*. Doubleday (1990). 127-129 を、列柱式建物については、Herr, L. G., "Tripartite Pilared Buildings and the Market Place in Iron Age Palestine", *Bulletin of American Society of Oriental Research* 272, 1988, pp. 47-67 をそれぞれ参照。

追記

尚、本文をまとめるにあたって、金関 恕先生、小川英雄先生、M・コハヴィ先生、M・フィッシャー先生、G・コヴォ氏、山内紀嗣氏、用田政晴氏、A・リサリオ氏のお世話になった。また、故三浦泰蔵先生からは、琵琶湖を通して人と湖をあらためて見直すきっかけを頂戴した。深謝。